



古代東国の
フロンティア・上毛野

カミツケノ

上毛野氏と東山道十五国都督

ヤマノミチ

カミ

小池 浩平 著

みやま文庫

はじめに

私が歴史に興味を感じるきっかけとなったのは、高校二年生の時の埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘の発見に関する新聞記事である。新聞の一面に「大和政権の勢力が東国に及ぶ」という大きな見出し、古墳から出土した鉄剣に金象嵌で百十五文字が刻まれ、「辛亥年（西暦四七二年）」という年紀や「獲加多支鹵大王（雄略天皇）」という大王名が記され、五世紀後半に関東地方へ倭王権の勢力が及んでいたことがまさに証明されたのである。私はこの世紀の大発見に感動するとともに、一つの史料の発見によって歴史が大きく塗り替えられることを痛感したのである。

その後、学習院大学文学部史学科へ進学した私が、群馬県の古代史を学ぶきっかけとなったのは、『上毛野国』という本との出会いである。これは読売新聞社前橋支局記者岡島成行が、群馬大学名誉教授尾崎喜左雄の監修のもとに刊行したもので、東国で強大な地位を築いた上毛野国の姿について古墳文化を通して概説したものである。その中で、上毛野国を築いた上毛野君一族について、尾崎と松島榮治がそれぞれ自説を展開し、尾崎は「上毛野国が強大だったのは大和政権との密接な関係があった」とし、松島は「騎馬民族が日本に渡ってきて（中略）そのうちの一团が毛野地方に来た」とし「独立王国だった上毛野国が大和政権に対抗していた」と論じる。私は郷

土群馬の古代史へのロマンを感じるのと同時に、郷土群馬を誇りに感じた。

さらに学習院大学では、私の歴史研究にとって最も大きな影響、というよりもまさに自分にとっての奇跡的な出会いに恵まれたのである。それは恩師である故黛弘道教授との出会いである。黛先生は群馬県下仁田町出身で日本古代史の大家であった。私は黛先生の学恩をいただくことになり、さらには同郷のよしみもあつて、歴史研究に取り組む姿勢や考え方、さらには群馬県の古代史研究のポイントなど、黛先生からきめ細かなご指導をいただいた。そして卒業式後、先生から『上毛野国と大和政権』という本をサイン入りで頂戴した。私の卒業論文の提出期限である昭和六〇年一二月に刊行されたもので、しかも私の卒業論文と同じテーマでの著作であった。上毛野氏や上毛野国の動向について、列島全体を視野に置き、文献史料のみならず考古学・地名研究など様々な分野にも目配りしながら、お国自慢にならずに客観的・論理的に上毛野氏や上毛野国の全体像をしっかりと描き出しており、私の卒業論文がまったく足元にも及ばない拙い内容であることを痛感させられた。しかしそれと同時に、卒業後も群馬の古代史を引き続き研究し、深めていくようにとの黛先生からの叱咤激励と受け止め、その後自分自身の座右の書としてきた。

私にとって黛先生からご指導いただいた最も重要な上毛野氏研究の視点、それはこの著作の「はしがきに」にある次の一文である。

われわれは、毛野国の古代を考えると、(中略)日本列島全体を視野におさめ、その中

の一部としての東国、さらにその一角を占める毛野国というものを考えなければならぬ。毛野国の古代史は毛野だけで完結するものではなく、東国全体、さらには日本列島全体とのかかわりにおいて展開したのであり、また何よりも大和政権との関係、紀州との関係などを通じて日本古代史の重要な一部を構成したのであった。

黛先生は、卒業論文の指導を通じて「上毛野氏はもともとは中央豪族か地方豪族か」という課題を、私に繰り返し問いかけられた。この課題を解決することが上毛野氏研究において重要であるとの認識からである。著作の中で黛先生は上毛野氏の本質について、次のとおり述べられている。

結論としては、これ（上毛野氏）を中央貴族と見ればそう見えないことはないし、地方豪族といえばそうもいえる、というあいまいなことしか引き出せなかつた。つまり中央、地方という概念だけでは上毛野氏族の性格を十分に説明することができない、ということである。強いて言えば、中央貴族的な地方豪族ということであろう。（中略）上毛野氏はそのもとも中央から派遣された「都督」的地方豪族と言ってもよからう。

私は、当然のことながら、卒業論文ではこの課題に答えることはできずに大学を卒業した。その後、高等学校教諭・県文化財保護課指導主事・県立歴史博物館学芸員として、少しずつではあるが、自分なりに先生から与えられた課題に答えるために研究を続けてきた。黛先生は平成二二

年一二月に他界され、すでにご指導をいただくことは叶わなくなってしまった。私は本年で大学を卒業して三〇年目の節目を迎え、これまでの積み重ねてきた研究をとりまとめさせていただく機会を得た。そこで、黛先生の教えに沿って、東国（＝アヅマ）という世界をどう捉え、その東国において上毛野氏・上毛野地域はどのような位置づけであったのかという視点をもって本書を書き進めていくこととする。

以上、私の歴史研究に大きな影響を及ぼした三つの出会いと本書を記す意図について述べてきたが、次に本書をどのような構成で書き進めていくのかを簡単に述べておきたい。

第一章では、『日本書紀』にみえる上毛野氏の始祖である豊城入彦命に関する伝承記事の分析を中心に、五世紀における倭王権（倭の五王）の対外交渉や東国政策の中で、上毛野氏がどのように対応していったのかを、とくに紀氏とのつながりという視点で考察していきたい。併せて、『新撰姓氏録』にみえる上毛野氏同祖氏族の成立過程や、東国・毛野・毛人という名称の由来を解明し、上毛野氏が東国においてどのような政治的地位や役割を担ったのかを考える。

第二章では、『日本書紀』安閑天皇元年条にみえる武蔵国造の乱に関与した上毛野君小熊の記事を中心に、六世紀の継体以後の新たな倭王権の体制―大王と大連・大臣との合議体制―の中で、上毛野氏が大王や畿内有力首長とどのような関係性を持ち、東国政策を進めていったのかを検討する。上毛野地域が王権にとって重要なミヤケの地であるという視点を中心に分析を進めていく。

第三章では、『日本書紀』舒明天皇九年条にみえる蝦夷征討を行った上毛野君形名の記事を中心に、六世紀末以降の倭王権の華夷思想にもとづく小中華帝国をめざした動きの中で、上毛野氏が壬生部や君子部などの部民を介してエミシ政策をどのように推進していったかを分析する。このエミシ政策への対応こそが上毛野氏の本質を示しているのである。

第四章では、ユネスコ「世界の記憶」への登録をめざしている上野三碑を中心に、七世紀後半から八世紀前半における律令国家の形成やそれにもなう政策が、上毛野—上野国地域の政治や社会にどのように反映していったのかを把握する。上野三碑には、上毛野氏に関する直接的な記載はないが、石碑がもつ豊かな情報—列島全体のみならずアジア世界における人や文化の交流—から上毛野氏の実像を類推することが可能である。

このように、古代の有力首長である上毛野氏の実像について、四章仕立てで書き進めていくが、五世紀から七世紀にかけて上毛野氏が、地方首長として倭王権の中枢（大王や有力首長）と常に密接なつながりを保ち、上毛野以東地域（令制下の上野・下野・武蔵・常陸・陸奥）を支配する都督（地方の軍事を統轄する武官）という役割を担ったこと、そして上毛野地域は都督府のような戦略拠点に位置づけられ、まさに東国のフロンティア（最前線・最先端）であったことを本書で明らかにしていきたい。